

誰が為の魔法

虹野衣司

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

グラブルのシナリオイベント風に書きます。

スフラマール先生とビイ君がメインのストーリーです。

Cygameさん、私をライターに雇ってください！

目次

プロローグ	1
第一話 森での修行	4
第一話②	6

プロローグ

プロローグ

「次は炎の魔法よ…まずは先生がお手本を見せるわ。タイガー！ファイヤー！サイバー！ファイバー！ダイバー！バイバー！ジャージャー！！」

長い呪文とともに、極大の炎が上がる。

「す、すげえな…いようし！オイラも負けてられねーぜ！」

「ええ、ビイさんもやってみて」

「えつと…ファイヤー？タイガー？」

「ビイさん！タイガーからよ」

「タイガー！ファイヤー！ええつと…」

「ビイさん、まずはお勉強が必要ね。呪文を10個覚えて来るのを、宿題にしていたはずよ。補習が必要かしらね。休憩したら、お勉強をしましょう」

「うげ…オイラ勉強は嫌だぜ」

ここはグランサイファー。次の島までは時間があるため、ビイトスフラマール先生は魔法の練習をしていた。

もともと、ビイの魔法が使えるようになるまでレッスンに付き合うと言っていたスフラマールだったが、気付けば一緒に数多くの困難を乗り越えてきた。

「おつと、お前らか。さつき甲板の方ででけえ炎が上がってたようだが…」

「あら、ラカムさん。そうよ、今は魔法のレッスンの時間だわ」

「あのなあ。魔法の練習も大事だが、グランサイファーが壊されたら困るんだ。ちったあ場所も考えてくれ」

「ごめんなさい…そうよね、申し訳なかったわ」

「お、おう、わかりやいいんだが…」

ラカムがそそくさと操舵室に戻ろうとすると隣にいたノアが引き止め、発言をする。

「ラカム、グランサイファーはそんなに簡単には壊れないよ。仮に何

かあっても、ラカムがなんとかしてくるからね」

「そ、そんなわけあるか。燃えたら壊れるし、凍ったら木が腐っちゃうだろうよ」

「ふふ、ラカムならそんなことさせないと思うけどね…ところで、
ビィ」

「なんだ？オイラに用か？」

「ああいや、なんていうか…。魔法の練習頑張っているんだね。すごいことだよ。でも、君には絶対に魔法は使えないと思うんだ。そういう…」

「ちよつとノアさん。そこに正座しなさい！」

「え、ええ？話は最後まで聞いてほ…」

「いいかしら。人間に不可能はないわ。あるとしたら、可能性を知らないだけなの。私がいる限り、絶対にビィさんは魔法を使えるようになるわ！」

「あ、いや、今のはそういう意味ではなく——」

「ラカムさん。あの島にグランサイファーを止めてくださるかしら。あの島から強い霊脈を感じるわ。あそこでならきつと、ビィさんも魔法を使えるはずよ」

「お、おう…わ、わかったぜ」

スフラマールの力強い言葉に、ラカムは蹴落とされてしまう。

「いいかしらビィさん。あの島で絶対に魔法をマスターしましょう
！」

「なんだかわかんねえが、いいぜ！やってやらあ！」

こうしてビィの魔法修行が幕を開けた――。

信頼度加入キャラ：SR「熱血教師」スフラマール

奥義：「もつと熱くおなりなさい！」味方全体にランダムで強化効果

1 アビ：「レッスン！」味方全体の攻撃力を大幅アップ（2T）する代わりに魔力を5消費する。CT8↓7

2 アビ：「もつとレッスン！」味方全体のダメージ上限をアップ（1T）する代わりに魔力を2消費する。CT6↓5

3アビ：「まだまだレッスン！」味方全体の回復上限UP・弱体耐性UP（2T）。CT8

サポアビ：「もう少しがんばりましょう」魔力をターンごとに1回復。

第一話 森での修行

「というわけで、ノアさんとラカムさんにも来てもらいます!」

「ええ、俺たちもかよ…」

「まあまあラカム、いいんじゃないかな。僕たちも森でのんびりする機会なんて——」

「ノアさん!違います!修行に付き合ってもらおうのですよ!のんびりはできません。あの森には魔物も生息しているはずですよ。ノアさんとラカムさんはビイさんの修行に影響が出ないように、魔物退治をしてください」

「ちよ、ちよつとまったあ…」

「何か文句がありますか?ラカムさん」

「い、いやあ:別にそういうんじゃないかねえんだがよ…」

「ノアさんもよろしいですね」

「ああ、久々の運動だ、問題ないよ」

「ではビイさん、行きましょう!」

「お、おう、なんだかわかんねえが頑張るぜ!」

こうして一行は森へ繰り出した。

道中

「なあなあ、せんせい、もうずいぶん歩いたけど、どこまで行くんだ?」

「そうね:ビイさん、なにか感じないかしら?」

「なにかつて:あ、おいしそうなりんごの匂いだ!」

「ああ、待ってビイさん!」

駆けだしたビイを追いかけるスフラマール先生。

「ふふ、どうかな、ラカムは分かるかい?」

「ああ、ちよつとだがな。この先から魔力がガンガン出てるぜ」

「そうだね。そこがスフラマール先生の目指している霊脈だろうね。

あと10分くらいかな。ビイ君がまっすぐ進んでくれれば」

「全然ちげえ方向に進んでるみてーだな…」

ビイに追いついたのだろう、少し離れたところからスフラマール先生の怒った声がする。

「さて、俺たちも先に進みますか」
「そうだね、でもその前にお掃除をしないとイケないみたいだね」
「うわ、いつの間にか魔物に囲まれてやがる」
「ふふ、ラカムのちよつといいとこ見てみたいな」
「へいへい、お前さんも戦っておくれよ」

戦闘

おまけ

「こら、ビイさん！勝手に進んじやダメでしょう！先生の言うことを聞かない子は、メ、ですよー！」
「ええ、そうなのか…おいら、てつきりこつちだと…」
「もう、ビイさんったら…」
「でもよう、せんせい何か感じないか？って聞いたからこつちに来たんだぜ？」
「そ、それはそうね。確かに、私にも責任はあるかも…そうよね、事情を聴かずに怒るのは良くないことだったわ」
「へへ、そんなことより見ろよ…このりんご、うまそうだろ」
「すでに半分ほどかじったりりんごを見せつけるビイ。」
「え、ええ、そうね」
「ちよつと待ってるよ。せんせいの分も取ってくるぜ！」
「あ、ありがとう。えらいわ、ビイさん」
「そうよね、ビイさんは空を飛べる。決して私たちにはできないことを簡単にやってしまうのだね。ビイさんにしかできないことがある——などとスフラマル先生は考えていたのだった。」
「おいおい、早く進まねえと日が暮れっちゃうぞ？」
「まあまあ、旅は寄り道も大事だよね」
「あ、ごめんなさい、ノアさんラカムさん。さ、ビイさん、早くいきましょー！」
「待ってくれ、こつちにいいりんごが…」
「ビイの修行は、まだ始まったばかりだった。」

第一話②

一行は魔物と戦いながら森を進み、ついに霊脈にたどり着いた。

「ふいー。なあなあ、ここが霊脈なのか」

「そうよビイさん。魔力の高まりを感じるでしょう?」

「ん?そうか?オイラにはさっぱりわからねえぜ」

「いいえ、大丈夫よ!ここでこれからきっちり特訓すれば、必ず分かるようになるわ!」

「へへ、楽しみだぜ!」

「では、早速特訓を始めるわよ。まずは腕立て伏せ100回!」

「ええー!せんせー、そりや無理だぜ!オイラ手はあっても!」

「いいえ、ビイさん。あなたなら必ずできるわ。まず地面に立って…
言われるがままに、なんとか腕立て伏せをする体勢になるビイ。

「こ、これで本当にできるのか?」

「ええ、できるわ。それじゃあ行くわよ。1、2、3…」

「ちよ、ちよっと待ってくれ!オイラできてるか分かんねえぜ」

「ラカムさん、どう思ったかしら」

「いきなり振るのか!」

「で、どうかしら」

「ったく…。ビイは体を上げようとしたときに腕の力ではなく、羽の力が上がってるだろう」

「うん?そうなのか。腕立て伏せって難しいんだな」

「そこで、だ。おいノア」

「僕かな」

「お前しかいねえだろ」

「ふふふ、ちよっと待ってね。ラカムの考えていることは分かるよ。
こうすればいいんだらう?」

「うぎゃー!いきなり何するんだよー!」

「あ、ああ。ノア、正解だ。お前が抑えて置いてやってくれ。だが、その前に――」

「さすがラカムさんね。特訓の前に魔物のお出ましだわ」

「ふふふ、ラカムが褒められると僕もうれしいよ」
「ええい、いいからさっさと片づけるぞ」

戦闘

「なあなあ、倒してもきりがないみたいだぜ？」
「そう言われるとそうだな…」
「ラカムさん！きつとあそこが魔物の巣になっているのよ」
「おいおい、それじゃあ俺たちの特訓で魔物を起こしちまったってことか」

「ラカム、よそ見してると危ないよ？」

ラカムを襲う魔物を、間一髪のところまでノアが払いのける。

「わりいな…」

「気にしないでよ、ラカム」

「2人は本当に仲良しなのね。さて、このままだと練習にならないから場所を動こうと思うのだけど、いいかしら」

「オイラはせんせーに賛成だぜ。魔物に襲われたら特訓に集中できねえもんな」

「ああ、そうだな。俺も賛成だ」

「ラカムが賛成なら僕も賛成するよ」

「では、向こうの方へ行きましょう。きつと——」

「ぎゃー——！」

「!?今の声は？」

「向こうからだ。子どもが魔物に襲われてるかもしれないねえ、急ぐぞ！」

一行は子どもを助けるために駆け出した。